

ドクター・ハザマの



# バイタルサイン塾 36

## 薬局・薬剤師が提供する価値の変化

ファルメディコ株式会社  
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座  
 医師・医学博士 狭間 研至

### 機械化やインターネットの普及は調剤業務の価値を低下させたのか？

処方せんを応需してから細心の注意を払って処方監査、調剤、服薬指導を行っても、疾病の治癒や退院、そしてこれからの超高齢社会においては、人生の終わりを目指して走り続ける患者さんに、お薬をお渡しするだけの業務になるのではないかと——このような感覚を、最近「マラソンにおける給水ポイントのスタッフのようだ」と少々過激に表現しています。もちろん、マラソンにおいて給水ポイントは必須ですし、そこで各ランナーにオーダーメイドのスペシャルドリンクを正確、迅速、快適に渡すことは極めて重要で、これは、薬物治療における医薬品の位置付け、薬局および薬剤師の役割においても重要です。

しかし、医療提供施設としての薬局、医療従事者としての薬剤師のあり方や、お薬が体内に入った後、どのような作用を引き起こすのかを知っている薬剤師の専門性を考えたときに、ジャストミートしているとはいえないのではないかと考えています。

一方で、「調剤薬局」というあり方についても、変化が見られています。20年ほど前は、誰もその業務について疑問を持つことはなかったと思います。国の医薬分業の施策にのっとり、年々上昇する分業率に対応すべく、質の高い「調剤業務」を作り上げることは最重要課題でした。薬剤師がお薬を調製してお渡ししたり、お薬の効能・効果や用法・用量についてきち

んとわかりやすく説明すると同時に、投与した薬剤に関する記録を一元化して、重複投与や相互作用をチェックすることの意義は大きかったです。これがま

さに給水ポイントと似ているところです。もちろん、この重要性や意義は今も変わりませんが、昨今の機械化やインターネットの普及というわが国に起こった「革命」は、その価値を相対的に低下させてきたのだと思います。

### 機械化で生み出された「時間」を使い薬剤師の新たな価値を具現化しよう

薬剤師のバイタルサインというテーマは、結果的に薬剤師が「新たな価値」を産むきっかけとなるものと捉えています。在宅医療の現場に赴き、自らが調剤した医薬品の効果や副作用を確認、その「謎解き」（＝フィジカルアセスメント）を行って医師にフィードバックし、医療のPDCAサイクルの中に薬学を落とし込んでいくことは、超高齢社会に求められる新しい医療環境を創造していくためにも重要です。このことを私が運営する「ハザマ薬局」でまずは試してみて、そこでの多くの失敗や小さな成功を共有して、社会全体における人、組織、社会の変革につなげていくことで、「薬局から始める地域医療イノベーション」を具現化できればと考えています。

しかし、そのためには時間が必要です。医薬品を正確、迅速にお渡しできなければ薬物治療は進みません。限られた時間、限られたマンパワーで、今でも日常の薬局業務に追われているのに……と悩んだときに、機械化やインターネットの普及に対する見え方は一変するのではないかと思います。

今の文脈では、薬剤師の仕事がなくなっていく、患者さんは薬の情報を簡単に手に入れられるようになっていく、というネガティブな捉え方をされることが多いです(図)。しかし、よく考えてみれば、給水ポイントが機械化されたり、自動販売機になったりという変化のようなもので、その分、薬剤師には時間ができます。その時間を、在宅訪問や「謎解き」に割り当てられると考えれば、昨今の変化もポジティブに捉えられるのではないのでしょうか？



© Kenji Hazama, M.D., Ph.D.